おごせ教育 Pick up

おごせっ子広場

町内の小中学校や町の行事等に参加する子供たちを写真で紹介するコーナーです。

越生小学校

5月29日、低・中・高学年に分かれて運動会を行いました。「～協力・全力・最強　希望を胸に勝利をつかめ～ほのおの赤　だんけつの青」のスローガンのもと、最後まであきらめず、力いっぱい取り組みました。

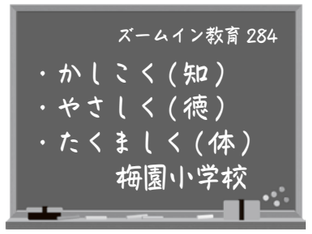
梅園小学校

5月29日、春季運動会を開催しました。大玉送りや玉入れ、全校リレーなど、児童は一生懸命に競技に参加しました。中でも表現の種目は、高学年がおそろいのはっぴ姿で「ソーラン節」を凛々しく踊り、低学年は軽快なリズムにのって「スーパースター」をかわいく踊ることができました。

越生中学校

5月22日、第75回体育祭を開催しました。当日はグラウンドコンディションを整えるために保護者の皆様にもたくさんのご協力をいただきました。

「気炎万丈～努力の先の宝物～」をスローガンに掲げ3年生が1・2年生を牽引し、素晴らしい熱戦が繰り広げられ、一人一人がかけがえのない宝物を手に入れました。



梅園小学校では、かしこく（知）・やさしく（徳）・たくましく（体）を学校教育目標とし、目指す児童像として『夢や希望を自分の言葉で語れる子ども』を掲げています。これを実現するためには児童に自信をもたせることが必要になります。そこで、今年度は特に、教職員は児童に対して様々な場面で『誉めて・認めて・伸ばす』を実践できるように努めていきます。また、このことは、社会の変化を正確に予測することが困難な二十一世紀において、児童が、これから直面するであろう問題や困難、変化にいかに対処するかという受け身の姿勢を取るのではなく、変化を柔軟に受け止め、主体的に関わることが大切で、その素地として役立つとも考えるからです。

また、学校は教育目標の具現化のために以下の5つを重点目標とし、具体的な施策も掲げているので、一部を紹介します。

①一人一人の学力向上と自立する力の育成（かしこく）
○学び合い、教え合いを指導し、主体的に学習に取り組むようにします。

②豊かな心の育成（やさしく）
○読書活動や体験活動を通して、豊かな心を育みます。

③たくましい心と体の育成（たくましく）
○何事にも挑戦し、本気で取り組み、最後までやりぬく根気強さ、たくましさを育てます。

④安全・安心な学校
○いじめ、暴力、不登校、交通事故を「ゼロ」にします。

⑤家庭や地域に開かれた学校
○学校応援団の活用や地域との人材交流を図ります。

開校以来、百四十八年の歴史と伝統を守りつつ、児童・家庭・地域が今まで以上に連携することで「三方よし」の精神で学校運営を進めていきます。

▲4月中旬の縦割り班での全校遠足

越生浪漫 No.149

渋沢平九郎の敗走

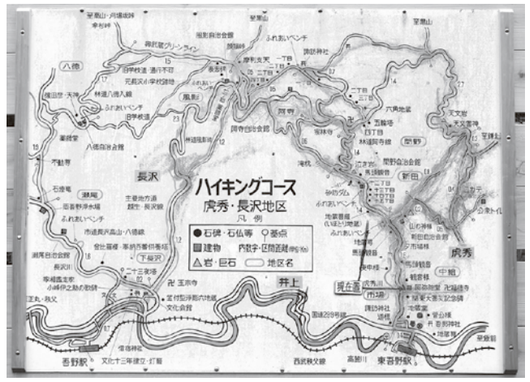
渋沢平九郎（渋沢史料館所蔵）

飯能戦争

慶応4年（1868）5月23日明方、旧幕府方の振武軍中隊組頭（右軍頭取とも）の渋沢平九郎は、兵150名を率いる頭取の渋沢成一郎（喜作）とともに飯能で官軍と戦いました。しかし衆寡敵せず、本陣を置いた能仁寺は焼かれ、午前中には振武軍は四散敗走しました。

説教節「飯能の嵐」

「永田田圃を後にして、小瀬戸村へ心ざす…ひと峰越せば子の山の麓を廻る吾野谷　秩父街道横切りて　高麗と入間の郡境　顔振峠にさしかかる」は、幕臣平九郎の短く勇敢な生涯を伝える説経節『飯能の嵐　澁澤平九郎自刃の段』の一節です。昭和12年（1937）に飯能出身の大野鉄人（嘉太郎）が作詞し、説経師の初代若松若太夫が節を付けたもので、敗走中の平九郎が名栗街道（現県道70号）沿いの村から峰を越え、秩父街道（現国道299号）を渡って峠へと向かったと謡われています。しかし平九郎をはじめ旧幕府方の敗残兵がどのように逃げたのか、当時の記録はなく、はっきりとは分かっていません。



飯能市の虎秀・長沢地区のハイキングコース看板

飯能から顔振峠へ

奥武蔵研究会の町田尚夫さんの「奥武蔵に澁澤平九郎の足跡を探る」（『青淵』第七四二号・七四三号）を参考に、現地踏査を行いました。昭和45年（1970）に東吾野郷土研究会が発行した『東吾野郷土誌』には次のような記載があります。「井上の糸引き山の所から川を越えて中峰に来て姿を変えて岩段から阿寺にぬけ面振り峠から黒山に抜けた」「口碑によれば中峰の石橋で髪型を直して町人姿に変えて山に登った」とあり、町田さんは、ここに登場する地名や景色の所在を確認し、「平九郎道」を再現しています。

また、虎秀・長沢地区には、「能仁寺で敗れた兵士が農家で食事を乞い越生に逃れた」「平九郎が敗走の際に走った」との伝承もあります。

飯能市井上の中峰集落に架かる石橋から阿寺方向を望む

顔振峠から黒山村へ

「…昌忠来リ惇忠ニ云フ、深入リシテ敗レタリト遂ニ相失ス」（『渋沢平九郎昌忠伝』）兄惇忠らとはぐれた平九郎は、ひとり顔振峠に姿を現しました。茶屋の主人の助言を受けて大刀を預けた平九郎は、官軍が詰めていない間道を勧められますが、別の道を選んで黒山村（越生町大字黒山）へ下り、官軍と遭遇し孤軍奮闘して最後には自刃しました。

飯能と越生に跨る顔振峠は、江戸時代後期には「かはぶり・かあふり峠」と呼ばれ、吾野から越生を経て江戸へ出る者は必ず通る峠として知られていました。明治以降の国土地理院の地形図には、「面振・顔振峠」と記載されていましたが、平成の初めに地元での呼称に変更・統一されました。

平九郎が下りた旧道は、県道61号線（越生長沢線）の約1.6キロメートルの未改良区間として残っています。県道の舗装区間に出て、小橋を渡って顔振川沿いの旧道を進み、再度川を越えると「渋沢平九郎自決の地」に辿り着きます。

大河ドラマで平九郎の勇姿がどう描かれるのか楽しみでもあり、平九郎ロスに耐えられるのか今から心配です。

顔振峠と黒山を繋ぐ旧道と林道笹郷線との交差地点